

平時と災害時の連続性に目を向ける

菅野拓ワールドに寄せて

同志社大学教授／人と防災未来センター上級研究員

立木茂雄



1. 問題関心と経歴

菅野拓氏は、災害研究やサードセクター論の新進気鋭の研究者である。氏が人と防災未来センターの専任研究員となった2014年より、研究上のパートナーシップを組み、以来、科研費等のプロジェクトでもともに研究を進めてきた。今回、「私の災害復興研究」を拝読し、菅野氏の研究者・実務者としての歩みを概観する機会を得て、いくつかのコメントを寄せたい。

氏の経歴であるが、大学に入学したのが2001年ということは、およそ30年弱（研究者としては、2世代くらい）のひらきがある。しかしながら、これから述べる菅野氏の本質―現場に寄りそう研究者であるとともに、省察力に富んだ実務者―のゆえに、氏との対話は常に刺激的で、チャレンジングなものであり、世代の開きをほとんど意識せずに関わってきた。これは、菅野氏が東日本大震災という新次元の出来事を契機として災害研究の道に入られたのと同様に、小生も阪神・淡路大震災をきっかけとして災害研究を志した経緯があり、氏のなかに自分と同じものを感じるからなのかもしれない。

「被災者はホームレス」という挑戦的な言辞は、災害復興の制度が、他の社会福祉的な分野では当然であるような支援や制度と連関していないことへの違和感に根ざしたものだという。しかも、これは評論家的な発言ではなく、仙台市での「日本版の災害ケースマネジメントの最初の事例」（2011年6月から）の立ち上げや運営にたずさわった実感から発せられたものである。拙者は、後述するように100パーセントこの発言に賛同するものではないが、違和感をあえて口に出す氏の資質こそ、災害研究における研究と実践を架橋する上で極めて重要なものであると考える。

災害研究者の必読書のひとつに Enrico Quarantelli が創始したデラウェア大 Disaster Research Center につながる執筆陣を中心とした *Handbook of Disaster Research* がある。この第2版（Springer, 2018）に、Joseph Trainor たちが「災害の科学と防災・減災における研究と実践の架橋について」という重要な章を執筆している。その一番の主張は、研究と実践は決して2つの異なった分野なのではなく、自己省察を絶え間なく続ける実務者(the reflective practitioner)であること、現場に関与し続ける研究者(the engaged academic)であること、これら2つの態度がひとつの「災害の科学と防災・減災の実践」を可能にする、というものである。そして、ひとりの生身の人間のなかに、このふたつを兼ね備えているのが菅野拓ではないか、と思うのだ。

2. 災害復興研究へのまなざし

菅野拓氏のこれまでの実務者・研究者としてのあゆみをながめると、第1には被災者生活再建支援や生活困窮者自立支援の最前線に立った自己省察的な実務者としての経歴がある。第2は、生活再建支援上の具体的な問題の提示と、その解決の方策を示す応用研究(applied research)であり、地域安全学会への投稿（6編中5編）論文を中心としている。第3は、サードセクターをフィールドとした社会的課題の解決メカニズムの構造や機能に注目した人文地理学的な5編の基礎研究(basic research)論文である。

菅野氏のような実践者から研究者へという経歴パターンは、社会科学としての自然災害研究を創設した Gilbert White の歩みを思い起こさせる。シカゴ学派の生態学的な社会地理学者として出発した White は、

1960年代の民主党ジョンソン政権に積極的に関与し、洪水保険やハザードマップの制度化に深くかかわった。その後、コロラド大学ボルダー校で自然災害研究という学際的な研究プラットフォームを主宰する。このプラットフォームを具体化したものが、毎年7月の第2週にひらかれる Natural Hazards Workshop で、今年で44回目を迎えるまでになった。

White らの自然災害研究への一番大きな貢献こそが、全米の防災対策の批判的検証であり、70年代の第1回目検証—「洪水は神のみ技であるが、洪水による損失は人類の手によるものである」が有名—は、土木万能主義の防災対策が、災害被害額をより大きなものにする現実に警鐘を鳴らした。第2回目の批判的検証は Milette らに引き継がれたが、2005年ハリケーンカトリーナによるニューオリンズの壊滅的被害は、White の卓見が依然として真実であることを証明した。

White らによる、全米の防災対策の批判的検証は、一見すると防災工学的な業績としてのみ捉えられるかもしれない。しかしながら、White が1945年にシカゴ大学地理学教室に提出した博士論文「人類による洪水の調節」は、洪水現象の解決メカニズムの構造や機能の解明に動機づけられた基礎研究であり、その後の洪水保険やハザードマップの制度化の実務、防災対策の全米規模の批判的検証も、すべてで一つの大きなプロジェクトとなっていたことがわかる。

菅野氏には、White が示したような、「社会的課題の解決に関する基礎理論に立脚した、具体的問題解決に関する実践的研究」へと、これまでの業績や経歴を統合する道を是非進んで行って欲しいと願っている。

3. 災害復興がタコつぼ化しないために

災害復興を平時の社会と関係づける、という菅野氏の主張に評者は深く首肯するものである。ただし、「被災者はホームレス」という挑戦的な言辞には、すこしだけリプライをお許し願いたい。全米の災害研究のセンターとして、もう1カ所をあげるならテキサス A &

M 大学の減災・復興センターをあげたい。ここでつい最近までディレクターを務めていた Walter Peacock の重要な貢献に、「ぜい弱性のレンズモデル」(図1)がある²⁾。横軸は被災前、災害インパクト、被害、復興という時間の流れを示す。縦軸は被災者層の間に存在する不平等の指標である。Peacock ら(2014)の主張は、災害のインパクトは一様ではなく、高所得持ち家層では軽微にすみ、住宅再建も迅速に行われる。一方、被災前から脆弱な住宅に住まざるを得ない低所得層ほど、災害インパクトによる被害は大きくなり、その結果として住宅の再建までには、より長い時間がかかる、というものである。まさに、災害復興を平時の社会と関係づける典型的なモデルと言ってよい。この図の中に、筆者は菅野拓ワールドを追記してみた。この点線のワールドの中では、「被災者はホームレス」という命題は正しい。しかしながら、不平等・平等のスペクトラム全般を視野にいたした考察にまで踏み込むこと、それを今後の菅野拓氏の実践・研究には期待したい。

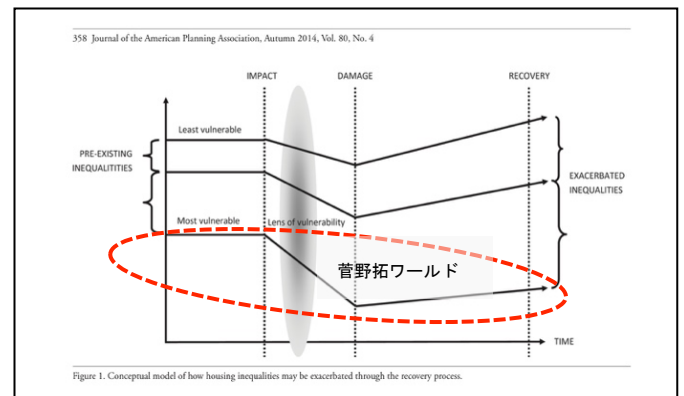


図1 ぜい弱性のレンズモデル²⁾

(菅野拓ワールドは筆者が加筆)

参考文献

- 1) Trainor, J.E., Stern, E. K. & Subbio, T. On Bridging Research and Practice in Disaster Science and Management: Unified System or Impossible Mission? H. Rodríguez et al. (eds.), *Handbook of Disaster Research*, 2018, 161-178.
- 2) Peacock, W. G., S. W. Zandt, Y. Zhang, and W. E. Highfield, 2014, Inequalities in Long-Term Housing Recovery After Disaster, *Journal of the American Planning Association*, 80(4), 356-371.